

(英語版)

(アラビア語版)

令和四年十二月

SF小説：「ナクバの東」(五十三)

第二部：「エスニック・クレンザー(民族浄化剤)」

五十三 悪魔の発明(1)

数日後、その男『ドクター・ジルゴ』は『シャイ・ロック』の家に現れた。秘書として彼を応接間に招じ入れたアナットは彼の洗練された着こなしに驚きを隠さなかった。今の彼はエリートそのものに見えない。かつてストーカーまがいの行為で妹を追いかけていた『ドクター・ジルゴ』は—その頃はまだドクターではなかったが—ヒッピー風の長髪に汚れたT・シャツ、洗いざらしのジーンズを着た青年だった。

ロシア系移民ということで肌が白いことだけが取り柄で、もし彼がアラブ系やアフリカ系であったならアナットはその青年に間違いなく罵声を浴びせていたであろう。その時のアナットは彼の肌の色に免じて彼の妹に対する無礼な行為を諄々とさとしただけであった。

という訳で二人は初対面ではなかったのだが、アナットは目線を軽く合わせただけでソファアをすすめた。

「父は先客がありますのでここでしばらくお待ちください」

『ドクター・ジルゴ』もまるで昔のことなど何もなかったかのようにソファアに身を沈めると部屋の中をぐるりと見回し、

「なかなか良い家具を集められましたね。マントルピースの上のリヤドロ人形がまた趣味の良さを見せています。こんな快適な部屋は滅多にないですよ。」

アナットは彼の如才なさに鼻白んだが誉められて悪い気はしなかった。



その時書齋の扉が開いて一人の初老の男が出てきた。それはテレビか新聞のどこかで見慣れた顔であったがすぐには思い出せなかった。

「どうも御苦労さまでした。父とのお話しはいかがでした？」

アナットの問いかけに男は何か答えようとしたが、ソファアに座った若い男が自分に強い視線を浴びせかけていることに気がきすぐに言葉を飲み込んだ。

「將軍は相変わらずお元気ですね。それでは今日はこれで。」

男は当たり障りのない挨拶をするとそそくさと応接間を出ていった。アナットがその後を追った。玄関の車寄せに乗用車が滑り込んで来る音が聞こえる。

「確かあの方は……………」

初老の男の名前を思い出した『ドクター・ジルゴ』が先客の見送りから戻ってきたアナットに問いかけた。しかし彼女はその質問を制するように彼をソファアから立たせると『シャイ・ロック』の待つ書齋へと案内した。

2 / 2

「父は忙しいものですから面会時間は当初のお約束通り二十分と言うことでお願いします。」
今の彼女は何処までも優秀な秘書である。

(続く)

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)

前節へ: <http://ocininitiative.maeda1.jp/EastOfNakbaJapanese.html>